
妖異討誓

熾葉田智之

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妖異討誓

【Nコード】

N9462Y

【作者名】

熾葉田智之

【あらすじ】

闇を跳梁する「妖異」という怪物を倒すことを生業にしている高校生・九条秋埜には、追っている人物がいる。

自分に似た容姿の男……。

その男の情目撃報を入手した秋埜は、「空原市」へと赴く。

目撃情報の提供者は秋埜の友人で、彼からは妖異の異常現界について

て調査を頼まれたのだった。

異常現界の調査をしていくうちに、秋埜はこの町に蠢く大きな闇に触れる。

空原で待つその運命は、秋埜を巻き込み加速度的に終末へと進んでいくー。

えー、つまり学園ダーク(?)ファンタジーです。

説明不要。読めばわかる！ だから読め！ いや、読んでください。

この作品は、某小説大賞に応募予定であり、執筆途中です。

本文は予告なく、変更します。

登場人物の名前も設定も変わる可能性があります。

また、突然公開をやめる可能性もなきにしもあらず。

そのことを念頭に置いてね。

これから読もうとしているその君、ありがとう！

序章

序章

それは闇の中で蠢く。夜陰に、あるいは物陰に隠れて生命を狩る。その目的は判明していない。空腹を満たすためか、あるいは渴きを潤すためなのか。

ただわかつていることは人類の敵ということだ。奴らとの戦いは数百年、いや数千年に渡って世界の裏側で人知れず繰り広げられている。

退魔の力。それは希少で、奴らに対抗し得る数少ない力だ。九条秋埜は退魔の力を持っている。その力でもって数多くの魔の者を屠ってきた。

そして彼は探している。どこかにいるであろう、仇を打つべき？もうひとりの自分を？。

しんと静かな町中を彼は歩いていった。空には三日月が顔を覗かせている。

「妖異の異常現界、か……」

夜道をひとり歩く少年はつぶやく。

「そして、あいつがいるかもしれない……」

暗い感情のこもった呻きのような声を彼は発する。

彼 九条秋埜は定住せずに各地を転々と移動し、妖異を狩っている。

前回の仕事が終わった直後、友人から連絡が入り、関東にある空原市というところに妖異の異常現界の兆候が見られるため、調査をしてほしいと頼まれた。

世話になった人の頼みなので無碍にもできないが、あまり気乗りはしなかった。

妖異の異常現界というのはあまり芳しいものじゃない。というのも妖異というのはそうそうこちらの世界に姿を現す存在ではないからだ。今回のような異常現界から推察されることは、この世界と向こうの世界のバランスが局所的に乱れてしまっているか、そういう風に仕向けた者がいるかのどちらかしかない。

しかし秋埜は連絡を超越した彼のもうひとつの情報で　むしろこちらが本命で調査はついでにやってくれというニュアンスだった、空原町に行く明確な理由ができた。

捜している人物の目撃情報が空原町にあった。それが今回の依頼を受けた決定的な理由だった。

ふと秋埜は足を止めた。

（この気配……）

ざつと背後で音がした。振り返るとそこには巨大な犬のような獣がいた。白銀の毛が月明かりを受けて輝いている。

「これはまた大物だな……」

苦笑交じりの笑みを浮かべて秋埜はその獣を見やった。五メートルはあるつかという巨大な獣で、犬に似てはいるが細部が異なっている。

獣は低く吼えると秋埜に向かって跳躍した。

秋埜は腰に手をやる。が、その手はあるはずのものを素通りし、空を切った。

ちつ、と舌打ちをして秋埜は横に跳んだ。地を転がり、瞬時に起き上がる。そして秋埜は顔をしかめた。

「しまった……。メンテ中だったんだ……」

腰にあるはずの愛刀は定期メンテナンスに出していたのをすっかり忘れていた。

「しょうがないか。……これで応戦するしかないな」

秋埜は懷に手をつ込むと数枚なにかが書かれた札を取り出して空中に放る。

「ハッ！」

直後、宙に漂う札が輝き、激烈な青白い雷を獣に向かって放出した。

三条の雷は正確な軌道で獣に降り注ぐ。爆音を轟かせて、その衝撃が発する風圧が秋埜の髪をうしろに撫でつけた。

「やったか……？」

目を眇めて雷の着弾点を確認する。確実に命中はしたはずだが……。

数秒間この成り行きを見守る。もうもつと砂煙が立ち上がって、夜の世界の悪さに拍車をかけていた。

「……………！」

秋埜は目を見開いた。立ち上る煙を切り裂いて巨大な炎の玉が姿を現した。猛烈な勢いで秋埜に迫撃する。

秋埜はとっさに取り出した護符を盾にするように前方にかざす。

護符は見えない壁を作り、炎の塊を四散させた。視界が白熱し、秋埜は眩しそうに目を眇めた。

「……………」

光が収まり、回復した視界にはなにもない。ただアスファルトの道とコンクリートの壁が見えるだけだった。獣の姿はなく、気配も消えていた。

「逃げた、か……………」

秋埜はばつが悪そうに頭をかいた。と、ポケットが振動した。ズボンのポケットから携帯電話を取り出すと、それがぶるぶると震えていた。

「……………もしもし？」

『あ、秋埜さん？ 今どちらにいますか？ お迎えにいらすと連絡したのですが……………』

少女の声だった。かわいらしい、けどどこかゆっくりした口調だった。

「ああ……………えっともう着いたよ。今からそっちに行こうと思っていて……………」

わずかに焦りの含んだ声で秋埜は答えた。

『……なにか大事な用事でもあったんですか？ 何回かご連絡したんですけど』

「あ。うん。ちょっとね、散歩をね。どんな町かなあって……」

『……………』

わずかな間ができて、再び少女が口を開く。

『……もしかして、先程の大きな音は秋埜さん？』

「えっと……、はい。下見していたら偶然出くわしちゃったもんつだから……」

決まりの悪い表情で秋埜は電話先の少女にそう申し開きをした。

『秋埜さん！』

ひゃい、と突然のでかい声に反応して変な声が出てしまった。

『なにを考えているんですか！？ 今はこの町、危険なんですよ？』

しかも武器も持たないで……。なにかあったらどうするつもりですか！』

「いや……、それは」

秋埜の言葉を遮って少女は捲くし立てる。

『それもこれありません！ 今からお迎えにいきますから、そこを動かないでくださいね！』

「はい……」

秋埜の返事を聞くが速いか彼女は通話を切った。

ぼつんと秋埜はその場に立ち尽くしてつぶやきを漏らした。

「なんか、前途多難だな……」

序章（後書き）

これ書いたときは、別の小説の執筆を二作断念して、休養と称したサボリ活動のあとでした。

二作連続で途中破棄だったので、完結させるぞ！ という気持ちは相当でしたね！。

それにしても最近寒いね。

コタツに咲々って本を読んでいるときの幸福感すごい。

読んでくれてありがとう！

次回は、12月5日更新予定です。

一章「妖異の町」

1

ふああああ、と湖山祐奈はあくびをし眠たそうに片目を擦った。

「うー……。眠いい……」

半分まだ眠っている状態で祐奈は朝の通学路を学校に向かって歩いていた。腰ほどまである茶色がかった髪が歩きたびにゆらゆらと揺れている。

「おはよー」

背後からかかった声に振り返ると杏子が片手を上げてこちらに歩いて来るのが見えた。祐奈とは対照的に元気な声だった。

「おはよう……」

「なに？ どうしたの？」

杏子は祐奈に追いつくと眠そうな彼女の顔を覗き込んだ。

「んー……。ちょっと眠くて……。ふあ。だって、今日、すっごく暖かくてー……」

間延びした声で言って、祐奈はあくびを噛み殺した。

「あははっ。なんかいつもと別キャラすぎて違う人みたいだよ」

おかしそうに杏子は笑った。

「うー。しょうがないじゃん……。眠いんだもん」

「あっ。危ない！」

「え？」

直後、ガン！ という衝撃が祐奈の頭部を襲った。

「いったああ」

目元に涙を浮かべて祐奈は声を上げた。ぶつけた部分を擦りながら恨めしそうに電柱を睨みつける。

「もう！　なんでこんなところにこんなもんがあるのよ！」

叫ぶと祐奈は電柱を蹴り上げた。そして再び痛み顔に顔を歪めて声を上げる。

「ちよつとちよつと大丈夫？」

その様子をそばで見ていた杏子が気遣わしげに声をかけた。

「……大丈夫。はあ、電柱さんのおかげで目が覚めました。ありがとうございました」

ぶすつとした顔でそうつぶやいて祐奈は歩き出した。

「ふふつ。いつもの祐奈ね」

「ん？　なんか言った？」

「んーん、なんでもない。あ、そういえば昨日の事件知ってる？」

「事件？」

祐奈は首をかしげて横を歩く親友に問いかけた。

「まあ事件ってほどじゃないんだけどさ。なんでも昨日っていうか今日？　深夜に道の真ん中に雷が落つこちたってウワサだよ。雷が落ちたところから大きな犬が走り去るところを目撃した人がいるとかいないとか」

「ふーん……。なんだか最近そういうの多いよね。この前もうちの学校の生徒で怪我した娘いたじゃない。その女の子もおそろしい妖怪を見たとか言ってたらしいし」

「怖い？」

顔を覗き込むようにして杏子は訊ねる。

「ん。怖いって言うか……」

と、そこに遠くの方で自分の名前を呼ぶ声を聞いた気がして彼女は振り返った。

声の主を見つけ、顔をしかめる。

「祐奈……！　おはよう！」

名前を呼びながら走ってきた少年は祐奈に勢いよく抱きついた。

「久しぶりだな。元気にしてるか？」

「……元気だよ。っていうかお兄ちゃん、昨日も会ったじゃん」

祐奈と彼女の兄　敏也は空原学園高校の学生寮で暮らしている。もちろん男女別々であるが。男子寮と女子寮は少し離れた土地にあり、途中で通学路が合流する仕組みになっていた。

「そうは言ってもだな、祐奈に会えなかった数時間は俺にとって通常の三倍近くの時間が経過している感覚でな……。　　ってあれ！　いない！　おい、祐奈！。待ってくれよ！。一緒に学校行こうぜ！」

そう叫び敏也は、彼が熱弁を振るっている間に通学路を先に進んでいた祐奈のうしろ姿を小走りに追いかけた。

「相変わらずだね、祐奈のお兄さん」

振り返り、後方の敏也を見て、楽しそうに杏子は笑った。

はあ、と祐奈はため息をついた。

「もう慣れたよ……」

言って祐奈は背後をちらつと忍び見た。

「ま、悪気はないんだろうけどさ」

そして満更でもないように祐奈は笑みを浮かべた。

1（後書き）

次回の更新は12月7日です。

「　というのがわたしの考察です」

テーブルを挟んで向かいにいる少女から報告を受けて秋埜はうなずいた。

黒い髪を長く伸ばしたどこかあどけなさが残る顔をした少女だった。なぜか彼女はメイド服を着ていた。

「そうか……。じゃあやっぱ妖異の異常現界の兆候が見られるってことなんだな」

「はい。先月からこの町で多数の行方不明者や大型の獣の目撃情報などが報告されています」

少女　和葉は秋埜の身の回りの世話と妖異討伐の手伝いをしてる。出会いは数年前に遡るが、秋埜も和葉もその時のことを思い出したくないようで進んで話すようなことはあまりなかった。

和葉は前回の仕事が終わったあと、その後始末をする秋埜に先行してこの町にきて調査をしていたのである。

テーブル上に広げられた空原町の地図に目を落とす。所々に赤いマーキングが記してあった。

「昨日の俺が戦ったのがここか……」

ひとつの印を指差す。

その場所からそう遠くない場所にふたつ、マーキングがあった。

「これは……」

地図をよく見ると赤い印はある場所を中心に記されていることがわかった。

「気づかれましたか？　空原学園高校。そこを中心に妖異が事件を起しています」

秋埜はしばらく沈黙して地図を睨みながらなにかを考えていたが、

やがて口を開いた。

「……まずここに行ってみよう」

「ここか……」

秋埜は空原学園の正門前に立ち、そこから見える校舎を見上げた。至って普通の校舎に見えた。

「特に怪しい感じはしないな……」

秋埜は呟く。

妖異の異常現界となる場所は例外なく障気がかもっている。障気を辿ることで異世界と繋がる空間の歪みを見つけるのが一般的なやり方だ。しかし、その歪みがなにかの影響で隠れている場合がある。そういう場合は何者かの意図的な力が働いていることがあり、その場合はやつかいだった。

「よし、ちよつと周辺を見て回ろう」

はい、と和葉は秋埜に促がされて歩き出した。

ぐるりと学園の敷地の外を歩いてみる。一通り歩いて秋埜は足を止めた。

やはり障気のような負の圧力は感じられない。

だが和葉の報告を聞く限りこの学園が妖異の現界になんらかの関係があるのは間違いないはずだ。

「とりあえず潜入調査かな……」

つぶやいて、秋埜はある一点に目を留めた。

グラウンドでは女子学生が体育の授業していた。きゃーきゃーとはしゃいでいる様子が目に入った。

「……………」

「……秋埜さん？」

「あ、なに？」

和葉の声に振り向くと彼女は目を尖らせて睨んでいた。一転笑顔に戻る。

「なにを見ているんですか？」

怖いぐらいの笑顔でそう言われ、秋埜は引きつった笑みを浮かべて回れ右をした。

「さ、さて。じゃあ他のところに行ってみよう」

歩き出す秋埜の背中を見つめ、和葉はため息をついた。

「もう……」

2（後書き）

意見や感想などお待ちしています。
気軽にメッセージくださいませ。
一言でも長文でも何でもござれ。

授業が終わり、祐奈は友達と一緒に街に遊びに出かけていた。

いつものコースを歩き、お気に入りのアクセサリーショップなどに寄ったりして、祐奈たちは夕食をとファミレスに入った。

「バイバーイ」

「また明日ねー」

祐奈は家路につく友人たちに手を振った。こうやって街に繰り出し、ファミレスで夕食をとってお開きにする、というのが祐奈たちのいつものパターンだった。

と、携帯電話の着信音が鳴った。開くと、メールの着信が表示されていて発信者の欄を見ると敏也だった。

祐奈ー。みなみちゃんから聞いたぞー。遊びに行くのはいいけど、あんまり遅くなるなよ。最近物騒だからさ。……祐奈になんかあったらと思うとお兄ちゃん安心してご飯も食べられないんだよ。くれぐれも気をつけてな。なんかあったら電話しろよ。

メールを読み祐奈はため息をついた。

「……もう。心配性なんだから」

心配してくれるのはありがたいしうれしいけど多分に過ぎてちょっと疲れる。

いつものように「大丈夫だから心配しないで。寮に着いたらまたメールするから」と返信する。

一連の祐奈の対応を見て、杏子は呆れたような楽しそうな笑みを浮かべている。

「もしかして、また？ 祐奈のお兄さん、ホント心配性だよな」

「……うん。大変だよー、いつも」

あはは、と祐奈は微苦笑を浮かべた。

「でもまーちよつとうるさいけどさ、心配してくれるのはうれしいよ」

「ふふつ。祐奈も祐奈よね」

「ほえ？」

「なーんでもない。それじゃ私こっちだから。またね」

かわいらしく手を振って杏子は歩いていってしまった。

祐奈は首を傾げ、先程のやり取りについて考えたがわからなかった。それで寮に帰るため歩き出した。

湖山祐奈は今年で十七才になる高校二年生で、兄である敏也は一個上の三年生だ。

湖山兄妹はふたりきりの家族だった。

祐奈が中学生に上がって間もなく、彼女の母親はこの世を去った。もともと父親の方は八年前に病気で亡くしていて、だから中学生のその日、祐奈は親という存在を両方とも亡くしてしまった。ただ母親の方は死亡を確認したわけではないから、正確にはどこかで生きているかもしれない。だが四年前の春の日、彼女たちの母親は忽然とその姿を消した。半年に及び搜索するも痕跡ひとつ見つからずに搜索は打ち切られた。

近くに親戚もいない彼女らは相応の措置として施設に入れられるはずだったが、佑奈たち家族と親しいかった青年がうしろ盾をし、ふたりは彼の計らいで普通の（両親がいないことを除けば）中学生と同じような暮らしをすることができた。

高校に上がってから彼は懇意にしてくれて、いろいろな面倒を見てくれていた。彼は空原学園高校の非常勤の講師をしていたが、その傍ら別の仕事もしており最近顔を見る機会もなくて祐奈はちよつと寂しさを感じたりもしていた。

久し振りに会って話したいなあ、とそんなことを考えながら祐奈は暗がりの路地を行く。

空には月が浮かび、辺りは薄暗い闇が漂いはじめていた。

祐奈は急に朝杏子が言っていた事件のことを思い出し、辺りの暗さも相まって怖くなった。

（うー……なんだか気味悪いなあ。あああ、ダメダメ！ き、気のせい気のせい……）

そこでふと祐奈は歩みを止めた。

変なにおいを感じて辺りを見回す。

（なんだろ……）

においのする方に歩いていくと、次第にそのにおいは強まってきた。鉄のにおい。眉をひそめて曲がり角を曲がった祐奈が見たのは、大きな犬だった。

白い、巨大な犬。祐奈はこんな大きな犬を見るのははじめてだった。

そして気がついた。犬の口回りが赤く変色している。ぼたぼたとなにかが垂れていた。

はっと息を飲む。

その巨大な犬のそばに人が倒れていた。水溜りのようなものがあるのが見える。

グルル……、と小さく唸り、その巨大な獣は祐奈へと跳びかかった。

「……………」

祐奈は思わず目を瞑る。

浮遊感が体を襲った。

間一髪だった。秋埜は学生服の少女を抱きかかえ、妖異から少し離れた地面に着地した。

「ふう……、ぎりぎりセーフ」

秋埜は安堵の息をついた。

と、右手のひらに柔らかい感触を感じた。ふにふにとしている。

「ふに？」

なんだろうと首を傾げていると、

「秋埜さん」

名前を呼ばれて振り返る。

「なに？」

「……右手が、女の子のお尻を触っています」

秋埜が抱えている少女とは別の女の子　昨日電話で秋埜を怒っ

た少女はかわいい顔してとても冷たい目で秋埜を見ていた。

「うわわっ」

とつさに秋埜は右手の位置を変える。

「その女の子はわたしが預かりますわ」

「あ、うん。頼むよ、和葉」

秋埜は抱いていた少女を和葉に移した。華奢な体のどこにそんな力があるのか和葉は軽々と少女を抱きかかえた。そして、子供に言い聞かせるような口調で秋埜に詰め寄った。

「秋埜さん。こういうのは立派なセクハラですよ」

「う……。気をつけます」

「はい。あ、でもわたしなら別にそういうことをされても……によ……」

最後の方は声が小さくてよく聞こえなかった。秋埜は首を傾げ「

ん？ なに？」と問い返した。

「な、なんでもありません……！」

顔を赤らめながら和葉は叫んだ。

なんだか釈然としなかったが、今は長い時間話している余裕はない。秋埜は妖異に向き直る。

「その娘をどこか安全なところへ。……そうだな、さっき見つけた公園で落ち合おう。こいつを倒したら合流する」

「了解しました。お気をつけてください」

そう言い残し和葉は走り去った。

背後でそれを感じ、秋埜は妖異に一步詰め寄る。

妖異が威嚇の声をあげた。

「また会ったな。今度は逃がさない」

そう言つて秋埜は腰に手をやる。そこには鞘があつた。その鞘から刀を引き出す。すらりと伸びた長身の刃が月の光を浴びてきらりと輝いた。

「やっぱりこいつがないとな。さすがエリス、いい仕事してくれる」

刀のメンテナンスをしてくれた女性に感謝して自然と微笑んだ。

そして、刀の感触を確かめるように秋埜はその日本刀を軽く動かす。秋埜が構えると同時に妖異は地を蹴った。空中に跳び上がりそれを回避する。

眼下の妖異に向かって秋埜は開いている左手で懐から札を取り出し、宙に掲げた。閃光とともに、札から伸びた二条の雷が妖異を直撃した。

しかし妖異は煙る地面から勢いよく飛び出して、宙にいる秋埜に鋭い爪を叩きつけようとする。それを刀でいなして秋埜は着地した。振り返る。妖異は警戒色を強めてこちらを窺っていた。

しばしの間にらみ合い、その静寂を破つたのは白い獣だった。

襲いかかる獣から逃げようともせず秋埜はその場に留まる。

刀を腰溜めに構えて静かに機を待った。

交錯する一瞬前、秋埜はわずかに己の立ち位置をずらし、腰溜め

の刀を横に一閃した。

背後の遠ざかった妖異は、口から体を真横に裂かれ絶命した。
妖異は霧散し、夜の空気に溶けるように消えていった。

その気配背中で感じ、刀を鞘に収めた金属ぶつかり合う高い音が
夜の路地に響いた

「う……う……ん……」

小さく呻くと祐奈は目を開けた。

背中に冷たい感触を感じる。ぼうつとした意識の中辺りを見回し
てみると、どうやらここは公園のようだった。

（あれ……？　なんであたし……）

ゆっくりと半身を起す。どうやら祐奈はベンチに寝ていたらしい。
その理由が思い出せずに首を傾げていると、声をかけられた。

「気がついたみたいだな」

振り向くと月明かりの中、少年が立っていた。

「あ、えっと……？」

祐奈は困惑したように言葉に詰まった。

「大丈夫か？　怪我とかしてない？」

少年は近くにくると祐奈に訊ねた。

「怪我？　うん。大丈夫だけど……」

「そっか。よかった。　あ、はい。これ」

少年はペットボトルを祐奈に差し出した。

「あ、ありがとう」

受け取ったそれをまじまじと見つめていると、祐奈は喉の渴きを
感じて少年を見返した。

「飲んでいい？」

「もちろん」

祐奈はごくごくとペットボトルの水を飲み干していく。半分ほど
飲んだところで、ぷはあっと息を吐いた。

「あ、ねえ。さっき怪我がどうとか言ってたよね？　どゆこと？」

祐奈が訊ねると彼はうなずいた。

「俺はさつき向こうの道を歩いてただけ、そしたら君が道の真ん中に倒れてたんだよ。それでここにつれてきたってわけさ」

祐奈はきょとんと目を見開いた。

「え、え？ あたしが？」

「うん」

「倒れてた？」

「そう」

少年はうなずく。

祐奈はしばしの間、思索した。

記憶を探ってみると、空白の時間があるのがわかった。

ファミレスでみんなと別れ、ひとりで道を歩いていたら夜道の霧囲気に怖くなっただった。

そこまで思い出して、次の記憶はさつき公園で目を覚ますところに飛んでいた。

「そつか……、そうなんだ」

だから少年の説明に瞬時に納得した。

「あの、ありがとう。その、いろいろと……」

「ああ。別にいいよ。それじゃ」

そう言って彼は踵を返して公園の出口に向かう。

その背中をなんとはなしに見つめていると、ふと脳裏を過ぎるものがあつた。思わず呟いた。

「おつきな犬……」

はつと我に返って祐奈はその場に立ち上がって遠ざかる背中に問いかけた。

「ねえ！ おつきな犬見なかった？ 白くておつきなやつ！」

少年は足を止めて、肩越しに首だけ振り返った。

「さあ？ 夢でも見てたんじゃないか？ あ、帰り道気をつけてな」
手を振って少年は去っていった。

「夢……かな……」

白くて大きな犬がいて、それからもうひとり見た気がする。が、よく思い出せなかった。

「ま、いつか……。あたしも帰らなくちゃ」

歩き出そうとして鞆に入った携帯電話を取り出し、時間を確認する。

「げ……。っ。門限過ぎてるじゃん……。うー、怒られちゃうじゃんかあ……。はあぁ」

ため息と同時に肩を落として祐奈はとぼとぼと足を踏み出した。

「転校生？」

あの出来事から二日後、休日を挟んでの朝の教室で祐奈はうしろの席の杏子にオウム返しに聞き返した。

「そうそう。さっき職員室の前通りがあった時、それっぽいこと聞いたんだよね」

「ふーん……」

祐奈の返答は興味なさそうに、というか心ここに在らずといった感じだった。

「ふーん……。って興味ないわけ？」

「うーん。興味ないわけじゃないけどさ。ちょっと気になることがあつて……」

あれからずっとあの脳裏に浮かんだ映像が頭の隅に居座っていた。
(やっぱりあれは夢なのかなあ。それにしては)

妙にリアルだった。眼前に迫る巨大な獣。その獰猛な牙が鮮明に思い出された。

ガラガラ、と教室の扉が開いた。

「はい。席に着いてー」

その声に生徒たちは自分の席に戻っていく。杏子も口を噤んだ。入ってきた黒髪の眼鏡をした女教師は教壇の前に立つと、姿勢を正した。

「おはようございます。えーっとまず、今日はみなさんにお知らせ

があります。――入ってきて」

教師に促がされて人影が教室に入ってきた。

細身の少し癖のある黒髪の少年は黒板の前に立つと少し頭を下げ
てお辞儀した。

「九条秋埜です。よろしくお願いします」

「……………」

祐奈はお辞儀をするその少年を見て目を見開いた。

4（後書き）

読んでくれてありがとうございます。

果たして続きを待っている人がいるか不明ですが、まだまだ続きます。

次回は、12月15日――明日更新予定です。

「でも驚きだよねえ。まさかまた会うなんて思わなかったよ。しかも学校でさ」

「それはこっちのセリフだな……」

楽しい祐奈と対照的に秋埜はあまり気乗りしない風だった。

（これはまずったな……）

秋埜は心の中で和葉に愚痴った。

「転入手続きは完璧です！」

そうにつこり微笑み、高々と和葉が宣言したのは昨晚のこと。

渡された資料を確認はしたが、どこも問題はなかった。が、祐奈がこの学校にいるであろうことは失念していた。

冷静に思考すればこの町内にある学校のどれかに所属しているのだから、徹底して調べて空原学園だった場合は根回しして別のクラスにするべきだった。

とはいうものの既に決まったクラスを今更変更してもらうのもおかしい話だ。転校するという選択肢は論外だ。妖異の異常現界の原因はこの学園の付近で起きていてそれを調査するための潜入なのだから。

「九条君？ おーい」

名前を呼ばれて秋埜は我に返った。

「え？」

「大丈夫？ ぼーっとしちゃって」

「あ、悪い。ちょっと寝不足だね……」

曖昧にそう応え、ふと視線を感じてそちらに目をやると女の子と目が合った。

「えっと……」

「ふうん……。あなたが祐奈の言ってた……」

「うん？」

秋埜が首を傾げると彼女は片手を軽く振って、なんでもないという風な仕草をした。

「ああごめん。こつちの話。 私は外村杏子。 祐奈の幼馴染みで親友。 よろしく」

「ああ、よろしくな」

秋埜は差し出された杏子の手を握り返して握手を交わした。

学園生活を謳歌するのが目的ならこの先楽しくなりそうだとは思ったが、妖異の調査など裏の仕事をするためのカモフラージュとしての学園生活が秋埜の目的だ。 できるだけ目立たず、穏便に学園生活を送りたい。 仲良くなりすぎるのも別れるのが辛くなるので避けるべきであり、なによりこれは仕事である。

秋埜はなんとなくうしろめたいものを感じながら空原学園の学園生活の第一歩を踏みだした。

さて昼休み、秋埜は中庭のベンチに腰かけ、ぼうつとパンを齧っていた。 購買で買ったあんぱんだだった。

「意外といけるな、これ」

もぐもぐと頬張っていると、

「あれ？ 九条君だ」

と声が聞こえ、そっちを向くと祐奈がいた。

急に現れた祐奈に驚き、秋埜は食べていたパンを喉に詰まらせゴホゴホと咽た。

「だ、大丈夫？」

「だ、大丈夫大丈夫」

平静を取り繕って秋埜は姿勢を正す。

「それ、お昼ご飯？」

秋埜の右手にあるパンを見て祐奈が言った。

「ああ。今日天気いいだろ？ だから外で食べたくな」

「いい天気っていうか」

祐奈は空を見上げる。

雲ひとつない青空からは初夏の陽射しが燦々と降り注いでいる。

「ちよつと暑いかな。でも気持ちいいよね」

につこりと笑って祐奈は大きく伸びをした。

「湖山……さんはなにしてたんだ？ 散歩？」

「まあそんなところ。いい天気だしね。祐奈でいいよ。湖山さん、

なんてなんかちよつと変な感じするからさ」

「わかった。じゃあ俺も秋埜でいいよ」

「うん。りょーかい。……ところで秋埜君つてさ、その……失礼かもしれないけど、女の子みたいな名前だよな」

「う……。やめてくれ。それは自分でもわかってるから……」

それは子供の頃散々友達に言われてきたことだった。まして秋埜は線が細めで顔も中性的なので、小学生の頃はよく女の子と間違えられていたりしたのだった。

「あ、ごめん。その悪気があったわけじゃないんだよ？ そのかわい名前だなんて！」

祐奈が慌ててそうフロアするが、焼け石に水だった。

「それフロアになってないから」

「あう……」

祐奈は困ってうなだれた。

そんな祐奈を見て秋埜を笑った。

「そんなに気にしないでいいって。もう慣れてるからさ」

「ごめんね。その、あたしあんまりそういうところに気が回らないみたいでさ。気をつけてはいるんだけどね、なかなか直んなくて……」

……

「ふふ、楽しそうだね」

突然割り込んできた声に、ふたりは同時に声が聞こえてきた方を見た。

背の高い、柔和な笑みを顔に浮かべた青年が少し離れたところからふたりを見ていた。

「涼護さん！」

彼の姿を見るなり、祐奈の顔にぱあっと花が咲いたように笑顔が浮かんだ。

「やあ。久しぶり」

青年は軽く手を上げて答え、ゆっくりとふたりの近くに歩いてくる。

「いつこつちに帰ってきたの？」

「ついさっきだよ。仕事が終わって、またここで教師として働くための手続きをしにきてたんだ」

端整な顔立ちに嫌味でない自然な微笑みを浮かべたまま、その青年は秋埜を見やった。

「……………」

秋埜は息を飲んだ。

ほんの一瞬だったが、目の前の青年からただならぬものを感じ取ったようながして、秋埜はひるんだように動けなかった。

「そちらの彼は？」

青年はそう祐奈に訊ねた。

「あ、彼は九条秋埜君。あたしのクラスメイト」

「九条君、か……」。僕は吾桑涼護。ここの非常勤の講師をしているんだ。よろしくね」

秋埜に向き直ると涼護はにこりと微笑む。

「……………」

秋埜は軽く頭を下げる。

「うん。よろしく。それじゃ僕は行くよ。祐奈ちゃん、また今度ゆっくり話そう。敏也君にもよろしく言っておいて」

そう言って涼護は踵を返して校門の方へと去っていった。

その背中を見つめ、秋埜は内心首を傾げた。

（なんだったんだ、今のは……）

さっき感じた覇気のようなものは、もう感じられない。

（気のせいだったのか……。それとも……）

用心するに越したことはないので、彼にも警戒しておこうと思った。

5（後書き）

読んでいただきありがとうございます！

さて、次回の公開は12月20頃を予定しています。

闇。

辺りを見回してみても、なにもない。

ふと、視界に白いものが見えた気がした。

そつちを見ると、大きな犬がいた。祐奈よりも数倍大きなその犬は、鋭く紅い眼光の貫くような視線を祐奈に送っていた。

（……逃げなくちゃ）

そう本能が思っているにも、身体はいうことをきいてくれない。指ひとつ動かさなかった。

紅い眼光の怪物は品定めするように祐奈を見ていたが、グルルと低く唸ると、重心を低くして祐奈に飛びかかるうとする。

跳躍した怪物は、一直線に祐奈に降ってきた。

「……………」

祐奈は目を見開くばかりで身体の一部でさえ動けない。

助けて、という叫びは心の中で反響していた。

怪物の爪が祐奈に差し迫るその一瞬、なにかが祐奈と怪物の間に割って入ってきた。

刀を携えた男性。青年なのか少年なのか、祐奈よりも遥かに年上なのかはわからなかった。

ただ彼の横顔はどこかで見た覚えがある気がした。

（あなたは、誰……？）

はつと祐奈は目を見開いた。

がばつと上半身を起き上がらせる。

「どーしたの？」

向かいのベットで寝ていたルームメイトのみなみが眠そうな声で

訊ねてきた。どうやら起してしまったようだった。

「ごめん。なんでもないよ。ちょっと夢の中で驚いちゃって」

そう？　と言いながらみなみはベットに寝転がり、すーすーと安らかな寝息をたてはじめた。

それも見守り、考えごとに戻る。

「はあ……。またあの夢……。なんなんだろうなあ」

祐奈は独りごちてため息をつく。

あの日、秋埜にはじめてあった日の夜から同じような夢を何度か見ていた。とても現実感はないのだが、どこかで同じような体験をしたような気がする。

「誰なんだろうあの人は……」

「ふーん。なかなか興味深い話ねえ」

朝の通学路。学校に向かいながら祐奈は杏子に最近よく見る夢のことを話した。

「ま、あんまり気にしないほうがいいんじゃない？」

「そうだよ。それはわかってるんだけど……どうも気になっちゃって」

杏子は口許に手を当てて考える仕草をする。

「夢でなにかを感じ取る、ってどこかで聞いたことあるよ。あながち無視もできない感じね」

「夢でなにかを感じ取る……」

「でもさ、ほら、最近この町なにかと物騒じゃない。気をつけるに越したことはないよ」

「そうだね……。うん。そのうちわかるよね！　考え込むなんてあたしらしくないもんね！」

そうそう、と杏子は笑顔でうなづく。

「やっぱり祐奈は元氣じゃなきゃね」

「ありがとう。やっぱり杏子は頼りになるよ！」

笑顔でそう言うのと祐奈は鼻歌交じりに歩みを速めた。

その姿を杏子は優しい瞳で見つめていた。

すんなりとクラスに溶け込んだ秋埜は、既に数人気の合う生徒と友達になっていた。

放課後一緒に遊ばないか？ と誘われたが、秋埜は用事があるからと断わった。

「残念だなあ。でもま、しょうがねえか。また今度な」

気にした風もなく笑顔でさって行く彼は西崎健二という気さくな少年だった。目下一番仲のいい男友達だ。

秋埜が誘うを断わったのは理由があった。

妖異の異常現界の原因の調査をするためだった。異界門 省略して？門？と呼ぶのが一般的 が開いてしまったら大変なことになってしまふ。一刻も早く解決すべき問題だった。

「秋埜さん、こっちこっち」

手を振って自分を呼ぶ和葉を見つけ、秋埜は彼女と合流した。

和葉は空原学園の制服を着ている。学生服姿の秋埜と釣り合いを計るための処置だった。

「それでは行きましょう」

和葉は歩き出す。その歩みはどこことなく楽しそうだった。

「お前、なんか楽しんでない？」

「え？ そうですか？ 別に普通ですよ？ ただこうやって制服着て秋埜さんと歩いていると、学校帰りのデートみたいだなあって」
相好を崩し和葉はちよつと顔を赤くしてはにかむ。

「……デート？」

言われて見ればそう見えるかもしれない。恋愛とかにあまり慣れていない秋埜はわずかに動揺したが、冷静に考えた。

調査という内容はどう考えてもデートではない。

誰がどう考えてもそう思うだろうが、和葉は秋埜が大好きなため、一緒に行動するだけでもうデート気分だったのだった。

祐奈が寮に帰ろうと歩いていると、視界の隅に見知った顔が映りこんだ。

「あ、秋埜君。なにしてるんだろ」

単純に興味が湧いて、彼と話してみたいという欲求も相まって秋埜の方へと足を向ける。

「……あ」

近づいてみると、秋埜は少女と共にいた。少女は空原学園の制服を着ているが、見たことのない顔だった。楽しそうに微笑んでいる。対して秋埜はちょっと困ったような顔をしていた。

（誰だろう、あの女の子……）

ふっと秋埜が振り返った。

「……………！」

咄嗟に祐奈は電柱の陰に身を隠す。

（……なんであたし隠れてんのよ）

ちらっと秋埜たちを窺うと、彼らはどこかに向かって歩きはじめていた。

「……………」

祐奈はどうしても気になってしまい、ふたりを尾行することにした。

秋埜と和葉はとりあえず昨日見て回れなかった妖異の被害がでた箇所に行ってみることにした。

路地に入り、目的の場所に到着する。

「やっぱり、こういう薄暗いところの被害が多いなあ」

「ですね。妖異の思考回路は人を襲って魔力と共に血肉を喰らうことが最優先なんでしょうけど、目立ったことをすると危険だってわかってるのかもしれないね」

秋埜はしゃがんで道路を見回した。端の方にわずかに血痕のような痕があった。

「妖異か……。なんであんなもんがいるんだろうな……」

どこか寂しげな、気の抜けたような声で秋埜は誰にともなくつぶやいた。

「……………」

和葉はただ遠いところを見つめている秋埜の横顔を黙って見守っていた。

「なにしてるんだろ、こんなところで……………」

路地の真ん中で秋埜と謎の美少女はなにやら話し込んでいた。なにを話しているのかまでは聞こえなかった。

「……………あ、あとちょっと」

祐奈は一步踏みだす。と、つま先に道端に転がっていた空き缶が当たった。カン、と音がして祐奈は飛び上がった。

「誰だ！」

その音に秋埜は振り向く。

油断ない視線で物音のしたほうを睨んでいると、しばらくして祐奈が姿を現した。

「祐奈……………」

「あはは……。ごめん。秋埜君と女の子が歩いてるのが見えて気になっちゃって……………」

ばつが悪そうに祐奈は困ったような笑みを浮かべる。

「ああ、いや。別にいいよ。ちょっと驚いただけ」

言いかけて、さっと秋埜の顔が強ばる。

「？」

いきなりどうしたんだろうと祐奈は首を傾げた。

「伏せるッ！」

「えっ」

「くそっ！」

驚いている祐奈に秋埜は飛びつくが無理やり伏せさせた。次の瞬間、祐奈がいた場所を黒い塊が駆け抜けていった。

「な、なんなの……？」

ぽかんと祐奈はつぶやく。

秋埜は瞬時に立ち上がって、夕焼けに染まる空を見上げる。

夕陽を背に、巨大な鳥が翼をはためかせていた。

「なに、あれ……」

祐奈は膝をついたまま、目を見開いてその巨大な鳥を見上げる。

ふと夢の中の情景が脳裏に浮かんだ。声を出すことはできず、ただ吐息が漏れた。

「和葉！ 祐奈を頼む。昨日の公園に行ってくれ」

「はい！」

和葉はうなずくと祐奈に駆け寄って手を差し伸べる。

「立てますか？」

「あ、はい」

和葉に支えられて祐奈は立ち上がった。

「あれは……」

「とりあえず今は安全なところに行きましょう」

そう言って和葉は祐奈の手を取って走り出そうとする。

「ちよつと待って！ 秋埜君は！？」

「秋埜さんなら心配いりません」

「でも……」

振り返った祐奈が見たのは、腰から刀を抜き放つ秋埜の姿だった。

（……あ）

その横顔が、いつしか見た横顔に重なった。

夢の中での出来事 いや、数日前の夜のことが祐奈の脳裏に鮮

明に思い出された。

「さあ、行きましょう」

促がされて祐奈は走り出す。

背に秋埜のことを感じながら、

（あれは秋埜君だったんだ……）

と全てが納得できた。

既に辺りには夕闇が立ちこめはじめていた。
電灯が頼りなげにちかちかと明滅を繰り返している。

「お怪我などはありませんか？」

公園のベンチに腰かけた祐奈に和葉は落ち着いた口調で問いかけた。

「あ、はい」

妙なかしこまり方で祐奈は返答する。

「それはよかったです」

につこりと微笑むと和葉は視線を祐奈から自分たちがやってきた公園の入口へと移す。

「えっと……」

しばしの間ができ、その空気に耐えられず祐奈は和葉に声をかけた。

「はい、なんででしょうか」

和葉は振り返る。

「その……あなたは空原学園の生徒……だね」

「え？ ああ、これですか」

ちよんと和葉は制服の端を摘まんで見せた。

「ふふ……。制服って憧れてたんですよ」

満面の笑みで和葉は微笑んだが、あれ？ と首を傾けた。

「ごめんなさい。論点がずれてしまいましたね。これはちょっとした事情があって着てるんです。わたしは空原学園の生徒ではありません」

「そうなの？」

祐奈は不思議そうに首を傾げる。

「わたしの仕事はちよつと特殊でしてね。 あ、秋埜さん」
その声に祐奈は振り返る。

秋埜が公園の入口からこつちに向かつてきていた。

「ごめん。ちよつと待たせちゃったか？」

「いえ。 妖異は？」

「今度はちゃんと倒せたよ」

そうですね、と和葉は微笑む。

「妖異？ それって、もしかしてさっきのやつ？」

ふたりのやり取りを聞いていた祐奈が口を挟んだ。

「……………」

しかし秋埜はなにやら神妙な顔になり考え込んでしまった。

「うーん…………。 どう説明すればいいかな……………」

顎に手をやり秋埜は唸る。

しばらく三人とも押し黙り、最初に口を開いたのは祐奈だった。

「あの…………。 あたしね、思い出したよ。 秋埜君にはじめて会ったあの日、あたしはあの妖異？ って怪物に襲われて………… 秋埜君が助けてくれた。 …… ね、そうでしょ？」

言われて秋埜は軽く嘆息する。

「………… ああ。 そうだよ。 俺は祐奈を助けた。 …… でも、できれば祐奈には忘れてくれていた方がよかったんだけどな」

「なんで？」

「なんでってそりゃ、あんな怪物のこと知らない方がいいだろ？」

「それはそうかもしれないけど…………。 でも、あたしは知っちゃったもん。 知っちゃったら、気になっちゃうじゃん」

いくらか逡巡したあと、秋埜はため息をついた。

「仕方ない、か…………。 わかった。 こここまで巻き込んだんだ、ちゃんと説明するよ。 でも 」

「でも？」

秋埜は祐奈をまっすぐに見つめる。

「今から言うことは心の奥に留めておくこと。 決して誰にも言わな

「いように。誓えるか？」

「うん。誓う。絶対言わないよ」

「よし、約束だぞ」

「じゃあ、妖異っていうのは別の世界の生き物なんだ」

秋埜から説明を受け、祐奈は驚きの声を上げた。

「ああ。正確には別の世界から溢れ出したエネルギーみたいなのが俺たちのいるこの世界の生物に憑依したのを妖異って言う。そして奴らにとって俺たち人間は餌みたいなもんだ。人間は誰しも個人差はあるが魔力を持つてる。生命力みたいなものだ。それを奴らは喰うために人を襲うんだ」

「そうなんだ……。それじゃ、あたしにも魔力ってあるの？ それって漫画やアニメみたいな魔法を使うためのものだったりする？」

「簡単に言えばそんな感じ。訓練すれば簡単なのなら使えるようにはなるけど」

「あたしも使えるようになる？」

「訓練すれば使えるかもしれない。それは努力と祐奈次第ってことだな。魔力のコントロールと総量は天性のものでどうことできることじゃないからな」

「そっかあ。魔法に異世界からくる怪物……。うーん。うそみたいな話だけど、うそじゃないんだよね……」

「残念がらな。この世界はそういう危険と隣り合わせの世界なんだよ」

「でもびつくりだよ。まさかそんなファンタジーなことが現実にあるなんてさ」

「まあな。俺はちつさいときから妖異やら魔術やらに関わってるからそういう感情は持ったことないけど」

「そうなの？ あ、秋埜君は妖異を退治する仕事をやってるって言うってたもんね？」

「まあそんなとこだな」

「あれ？　じゃあ、秋埜君は本当は何才なの？　妖異を退治するた
めに仕事で空原学園に転入したんだよね？」

「俺は一七。年齢的には正真正銘の高校二年生だ」

「そっか。よかった」

につこりと笑みを浮かべた祐奈に秋埜は怪訝な顔をした。

「よかった？　なんで？」

「あ、ううん。なんでもないの。こつちの話だから！」

祐奈は慌てて両手を振る。

「？」

わけがわからず秋埜は首を傾げる。

「あ、ねえ。あの女の子は？　もしかして秋埜君の彼女？」

ひそひそと内緒話をするように秋埜に囁く。

祐奈の視線の先には和葉がいた。ぶつ、と秋埜は吹きだした。

ふたりの会話を聞いていた和葉振り返るとにつこりと微笑む。何
故か顔を赤くして。

「ええ。わたしは秋埜さんの彼女」

「じゃない！　と秋埜が割り込んだ。」

「和葉は助手だ助手。仕事のパートナーだよ」

「冗談ですよ。ちよつとくらい乗っけてもいいのに……」

不満げに和葉は頬を膨らませる。

「さつきは自己紹介しなくてすいません。秋埜さんがあなたにどう
いう風な処置を取るかわからなかったので控えさせていただきまし
た。　わたしは和葉といいます。秋埜さんの身の回りのお世話と
仕事のお手伝いをします」

よろしく願いますね、と丁寧にと和葉は頭を下げた。

「あ、はい。よろしく願います」

つられて祐奈も丁寧にお辞儀をした。

と、そこに遠くからなにやら叫ぶ声が聞こえてきた。よく聞くと、
祐奈を呼んでいるらしかった

「祐奈！　ここにいたか！　心配しちゃったぞ」

そう言つて敏也が公園の入口から駆け寄つてきて祐奈に抱きついた。

「お兄ちゃん……」

「電話にも出ないで心配したじゃないか！ まったくこんなところなにをして……、やや！ なんだ君たちは！ 怪しいやつか！」

ビシッと指を突きつけられ秋埜はたじろいでしまった。急な展開に思考がついていかない。

「えっと、俺たちは別に怪しい者じゃ」

秋埜の言葉を遮つて敏也は声を張り上げた。

「はっ！ わかったぞ！ さては祐奈を攫おうという輩だな。確かに祐奈はかわいいがそんなことが許されると あだだだ！ 痛い！ 祐奈痛い！」

祐奈は敏也の耳を引つ張りながら、呆れたような怒つたような声で怒鳴つた。

「まったく、そんなわけないでしょ！ ふたりはあたしの友達なの！」

「友達！？ ……そうか。友達か。ふむ、確かにふたりともうちの制服を着ているし……。これは失礼なことをしてしまったな。すまない」

そう言つと敏也は打つて変わつて礼儀よくお辞儀をした。

「ああ、いや……。はい」

戸惑いを隠せずに秋埜はばか丁寧に戻答した。

「俺は湖山敏也だ。よろしく。祐奈のお友達さん」

敏也が握手を求めてきたので秋埜は手を伸ばして握手を交わした。

「こちらこそよろしく」

敏也は秋埜に顔を近づけると、につこりとした笑顔のまま威圧するよな声を發した。

「祐奈に手を出したら、ただじゃおかないからね。そのとこ承知しといてね」

「……………」

秋埜は息を飲んで無言でうなずくいた。

そんなやり取りを見ていて祐奈は、はあとため息をついた。

「もっとお話したかったけど、しょうがないか……。秋埜君、あたしそろそろ帰るね。ほら、お兄ちゃん。行くよ。」

祐奈に促がされ、うむとうなずいて敏也は祐奈を追って踵を返した。

「それじゃ秋埜君、和葉ちゃん、またね！」

ああまたな、と秋埜は手を上げて応えた。

公園の出口まで行き、祐奈は唐突に立ち止まって振り返る。

「あ、秋埜君！ もしあたしで力になれることがあったら言ってね！ できるだけ協力するから！」

言って祐奈はにこりと微笑むとかわいらしく手を振って去っていった。

祐奈たちが退場し、しばらく無言の間ができた。

「秋埜さん？」

腕組みをして沈黙が続いている秋埜の顔を和葉は覗き込む。

「力になれること、か……」

「まさか手伝ってもらう気ですか？」

「そんなことあるかよ。危険なことに一般人は巻き込めない」

だけど秋埜には気になることがあった。

祐奈は、はじめて会った時と今回、計二回妖異に襲われている。

それが偶然なのか、それともなにかしら意味のあることなのか、秋埜はどうも判断ができなかった。妖異は基本的には手当たり次第に人を襲う。高位の妖異は知能が高いためその限りではないが。

それともうひとつ、妖異は高い魔力を秘めている人間を優先的に襲うという特徴がある。しかし、祐奈は秋埜の洞察する限りではごく微小な魔力しかない。妖異が何度もつけ狙う道理はないはずなのだが……。

そんなことを考えながら翌日の朝、廊下を歩いていると吾桑涼護とすれ違った。

「おはよう、秋埜君」

「おはようございます」

考えごとをしながら歩いてたため反射的な、感情のこもっていないあいさつになった。が、涼護が言った次の言葉で急速に思考が現実に戻った。

「昨夜は大変だったみたいだね」

秋埜は立ち止まると振り返った。

「……あんた、何者だ？」

警戒の色を含んだ目で不審そうに涼護を睨む。

僕は、と涼護が言いかけた時、ホームルームの開始を促がすチャイムが校舎に響いた。

「この続きは昼休みにしよう。ほら、教室に行った方がいいよ」
「……………」

秋埜はそれから昼休みになるまでなんともいえない微妙な気持ちで過ごした。もしかしたら吾桑涼護は敵かもしれない。妖異の異常現界に関係のある人物なのかもしれない。と考えても仕方のないことばかりが頭を回っていた。

昼休み、秋埜は資料室のドアを叩いた。

「はい。どうぞ」

「失礼します……」

中に入るとその教室は授業で使う紙の資料束や道具がそこかしこに積まれた窮屈そうな空間だった。

「やあ、いらつしやい。すまないね、こんなところで。ちょっと授業で使う資料を作ってたね。それに、ここなら会話の邪魔も入らないだろうから好都合だと思って」

回転式の椅子をくるりと回し、涼護は秋埜を柔らかな眼差しで見ると、それから苦笑した。

「そんなに警戒しないで欲しいな。まず言っておきたいことがひとつ。昨日は祐奈ちゃんを守ってくれてありがとう」

「いえ。祐奈は友達だし、妖異から人を守るのが俺の仕事だから。……俺が訊きたいのは、なんでそれを知ってるのかってことです」

「柊光行」

え、と秋埜は目を見開く。

まったく予期せぬ名前が涼護の口から発せられ耳を疑った。柊光行は秋埜の友人であり、世話になった。今でもいろいろと協力してもらっている。人物だった。今回の妖異の異常現界の調査の依頼と秋埜の捜し人の情報をくれたのが柊光行だった。

「なんで光行さんを……」

「光行さんは僕の知人でね。昔お世話になったんだ。黙っていてすまなかったね」

「……そういうこと、か。じゃあ吾桑先生、あなたは俺と同業者ってことですか」

考えてみればうなずける。はじめて涼護と会ったあの日、彼から感じた異様な圧力。あれは死と隣り合わせの戦いをしたものが放つ雰囲気だった。

「それはまあ昔の話だよ。黎悠会にいたのは何年も前の話で、今はしがない非常勤教師さ」

笑って言って涼護は立ち上がる。

「いまお茶でも入れよう。ちょっと君に頼みごとがあるんだ」

「頼みごと？」

「実はね、光行さんに君をこの町にきてもらおうよう頼んだのは僕なんだ」

え、と秋埜は首を傾げた。

涼護が自分をここに呼ぶ理由がまったく見当がつかなかった。秋埜と涼護は共通の友人がいるというだけで接点はない。それとも涼護は前から自分のことを光行から聞いていたのだろうか。

少し考えて、やられたと思った。秋埜の捜している人物がこの町にいるという情報は彼から聞いたものだ。光行は、恐らく涼護の頼みもあって秋埜に情報をくれたのだろう。一石二鳥だな、と思って秋

埜に提示したに違いない。彼はそういうところはしたたかなのだ。相変わらず油断できない人だ、と心の中で苦笑した。

「ああ、そっちに質素なテーブルがあるだろう？　そこに座って待ってね、いまお茶を入れるから」

そう言って涼護はトレイにティーカップをふたつ乗せて持ってきた。どうぞ、と言ってテーブルに置く。秋埜は黙って言われた通りに椅子に腰かけた。

「安い紅茶だけど勘弁してね。さて、さっき言った頼みと言うのはね、祐奈ちゃんと敏也君をを妖異から守ってほしいんだ」

「妖異から守る？　あのふたりは妖異から狙われる理由があるんですか？」

涼護の発言に疑問を抱き、訝りながら秋埜は訊ねる。

多少の間を置いて涼護は言った。

「あのふたりは僕のお世話になった人の子供でね。小さい頃から会っていて、家族みたいなものなんだ。……不幸なことに彼女の父親は八年前、母親は四年前に他界してしまった。僕はもうあのふたりにこれ以上不遇な思いはさせたくないんだ」

秋埜は黙って涼護の話聞いていた。というよりも、言葉が出なかった。

両親を亡くした。しかも自分とほぼ同時期だ。過去の自分と重なることがあったのだろう。秋埜は眉間にしわを寄せて思考をさまよわせていた。

「最近空原は物騒だ。妖異の異常現界が関連しているのか、空間も安定していない。この町は危険だ。だから、守ってほしいんだよ。僕の大切な友達を」

「……わかりました。できる限りのことはします」

そこで言葉を切って秋埜は涼護に訊ねた。

「でも、吾桑先生。あなただって妖異を倒すことはできるでしょう。なんで直接守ってあげないんですか？」

涼護は苦い表情を浮かべると首を振った。

「言っただろう？ 僕は黎悠会に？いた？つて。引退したんだよ。戦うことはできるけど、連戦はできない。下級の妖異ならともかく、中級や上位の妖異には太刀打ちすらできない。通常は中級以上の妖異はそうそう現れない。でも今回はことがことだけに可能性がある。だから、現役の、しかも恩師のお墨付きの君にお願いしているんだ」なるほど、とつぶやき秋埜は差し出された紅茶を一気に飲み干した。

「ごちそうさまでした」

立ち上がって涼護に背を向けて歩きだす。

「あ、秋埜君」

秋埜は立ち止まると、

「あのふたりを守るって依頼、確かに引き受けました」
そう言っただけで振り返ると微かな笑みを浮かべる。

「それに祐奈は俺にとっても友達で、友達が悲しむのは見たくないです」

秋埜が立ち去った扉をしばらく見つめ、ふと涼護は微笑んだ。

涼護が仕事を終え家に帰ってきたのは午後七時をまわった頃だった。

スイッチを押すと薄暗い部屋に明かりが灯る。と、電話が鳴った。受話器を取る。

「はい、吾桑です」

「久しぶりだな。どうだ。元気だったか」

渋みのある、よく通る声の男性だった。

「ええ。そちらも元気そうですね。光行さん」

ふ、と含み微笑う声が聞こえた。

「頑丈なのが俺のとりえだな。 秋埜には会ったか？」

「はい。光行さんの言った通りの少年でしたよ」

「だろう？ で、秋埜はなんと？」

「守ってくれると。 光行さん。ありがとうございます。いまの状況だと正直、僕だけではあのふたりを守り抜くことは厳しい……。光行さんに相談してよかったです」

「俺はなにもしていないよ。感謝なら秋埜にすることだな」

その物言いに涼護は口許を緩めた。

「しかし、もうあれから四年か……。短いものだな」

どこか感傷的な口調で光行は言った。

ええ、と涼護は苦々しげな声をだした。

「……あんまり責めるなよ、自分を」

「わかっていますよ。……いさするべきことは、あのふたりが遺した祐奈ちゃんと敏也君を守ってあげることですから」

「そついうことだ。……おっと、呼び出した。悪いな。また電話するよ」

いま行く、と返事をする声が受話器越しに聞こえてきた。

「ええ。あまり無理はしないで下さいね」

「ふっ。お前こそ根を詰めすぎるなよ。　ではな」

通話が切れ、ツーツーという機械音が耳に届く。

涼護は受話器を置くと窓際に向かい、閉まっていたカーテンを開けた。

それから視線を転じて、近くの棚に置かれた写真立てを見た。

そこには少年と少女、その両親らしい人物が楽しそうに映っていた。それは祐奈の家族だった。

(……………)

四年のあの日、祐奈の母親を最後に見た人物は涼護だった。

服はところどころ破れ、そこかしこから血が滲み出していて、足元には小さな血溜まりができていた。それは尋常の沙汰ではなかった。意識が飛ぶのを必死に堪え、彼女　美咲は立っていた。

『祐奈と敏也を、頼むわね……。　涼護……………』

そう母親の目と言って、彼女は微笑んだ。

涼護はうなづくことしかできなかった。あのあと、彼女は無くなった。死んだのではない、と思う。だが、あれ以降彼女の姿は見えない。だから、涼護はあの約束を守って、いつか帰ってくるだろう彼女を涼護は待ってしようと誓ったのだった。

(…………祐奈ちゃんと敏也君は元気ですよ。約束は守りますから　)
窓から空を見上げると、深い藍の空にきらきらと星がばらまかれていた。美咲はこの空の下どこかにいるのだろうか、そんなことを涼護は思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9462y/>

妖異討誓

2012年1月12日21時56分発行